「東京キリストの教会」についての新聞・雑誌報道

日本の新聞や雑誌において「東京キリストの教会」は、これまでどのように報道されてきただろうか。これまでこの団体を直接扱った記事は以下の5点である。

1）『キリスト新聞』1998年6月20日「なぜ若者は教会に来ないのか?」
2）『キリスト新聞』1999年8月7日「特集・ある新興宗教の伝道活動とその実態」
3）『朝日新聞』2000年10月25日朝刊「検証・カリスマを求めて〈上〉心のすき間にかかる声」
4）『朝日新聞』2000年10月27日朝刊「検証・カリスマを求めて〈下〉脱会後ほしい心の受け皿」
5）AERA（朝日新聞社）'02.3.25 No.13「脱カルトの苦しみ」

いずれも宗教問題をテーマにした特集記事の中で、取材対象となっている複数の団体の一つとして取り上げられている。団体名を明記しているのは、この団体を肯定的に報道した1）のみであり、批判的に取り上げている2）～5）は、いずれも団体名を伏せての報道である。以下、順に、それぞれの記事の概要を紹介しつつ解説する。

1）『キリスト新聞』1998年6月20日「なぜ若者は教会に来ないのか?」

この記事のきっかけは同年の3月に日本基督教団神奈川教区青年委員会主催の「高校生の集い」で、「教会ってどんなとこ？」をテーマに集まった高校生たちの声であったという。その集いで、若い人が教会から遠のいている理由として、「説教が長すぎて難しい」「礼拝が型にはまっていて、暗い」など率直な声が語られたとして、このような声を諸教会やキリスト教主義学校はどのように受けとめているかという形で記事は始まる。

先ず日本基督教団磯子教会の会員やカトリック上野毛教会の神父の声として、教会に若者が来ない現状が語られ、東京神学大学の実践神学部門の教授でもあった加藤常昭牧師の言葉として「教会に若い人たちが来ないのは世界的傾向」であり「教会は若い人に届く言葉を失っている」が紹介される。

次に、若い学生たちがリスト教に触れる機会に恵まれているキリスト教主義学校の現状が、聖学院大学、福岡女学院、国際基督教大学を例として報告される。そして、状況は困難ながらも、これらの学校においては「年たちが教会に導かれるきっかけになっていることは確か」と評価される。

以上が、記事全体の半分であるが、残り半分が「若者であふれ、急速に成長しつつある教会がある」という書き出しで始まる「東京キリストの教会」と「Hi･B･A･センター」についての記事である。「東京キリストの教会の礼拝風景」という写真が、この記事の冒頭に掲げられていることからも、この記事の主張は、多くの教会から若者が遠のき、キリスト教主義学校も苦戦している中で、若者を集めることに成功しているこの２団体を肯定的に評価して紹介することにあるのは明かである。

「東京キリストの教会」に関する部分についてみれば、この教会の急激な成長を、創立者の「ガーガナス宣教師がアメリカの大学生を連れてきたことがきっかけ」と記し、この時点で主流派の「キリストの教会」からボストン派の「国際キリストの教会」へ、所属教派が変わったことを見逃したり、この教会に特有の組織的階層構造であるディサイプラー制度を「より経験のあるクリスチャンによる指導」で「互いのコミュニケーションが緊密にはかられる」など、

団体側の主張を鵜呑みにしている点に甘さが見られる。

2）『キリスト新聞』1999年8月7日「特集・ある新興宗教の伝道活動とその実態」

上記の一面的な記事に対しては、「東京キリストの教会」の対策に苦慮している各方面からキリスト新聞社に対して批判が寄せられた。それを受けてほぼ１年後に組まれたのがこの特集記事である。ここでは統一協会やＭＳ（統一協会の元メンバーであった韓国人を教祖とする団体）とともに、「東京キリストの教会」が匿名のＡ教会として、批判的に取り上げられている。以下、この団体についての部分を要約する。

まず、「大学キャンパス内で活発に活動している団体にA教会があり、その伝道方法に対して多くの異議があがっている。その教えについて検証する」として、各大学での活動状況とその対応が報告される。

①上智大

Ａ教会の信者が無届で教室を使い、大人の伝道者が来て集会を行った。参加した20人中5人が学外者。同大は「教室の無断使用以外、不法行為とはいえず、具体的な被害が出ない限りは黙認するしかない現状」と言う。しかし、大学機関紙や立看板でその危険性を訴え、長期的視野で対処する構えである。

②聖学院大

電車の中で勧誘された学生が学内伝道を始めるというケースが発生。A教会に入り、人格が大きく変わった彼と話し合いをもつも平行線を辿る。同大では実名を挙げ、「カルト的傾向を強く持つ団体」だとして学生に注意を促している。同大宗教主任は、「近隣教会の牧師たちとA教会についての情報交換を行った」と語る。

③青山学院大

Ａ教会の伝道師が、夫婦で名刺を配っており、すでに何人かが入信。同大宗教部長は「毎月の宗教主任会では何度も話題になっている。今後注意を呼びかける文書をだすことを考えている」と語る。

④国際基督教大

7,8年前から、卒業生と称する伝道師が活動し新入生を標的に下宿や寮で勧誘していた。自殺未遂や学業放棄などの例もあり、学生たちに不安を与えるケースがあった。同大の宗務部長は「信者の学生による伝道は今もあるが、学生生活に支障が及ばない限り介入できない」

聖学院大が例外的だが、学外者が校内に入る以外に具体的に違法行為に結びつかないため、各大学は破壊的カルトとして対応していない。Ａ教会の実名を挙げられないのはそのためである。

次に、川島堅二（恵泉女学園大学助教授）の論文「宗教とカルトの間」に基づいて、この団体が米国でカルト視されてきたとし、その内容は「ある会員たちは明らかな人格の変容をきたし、そのリーダーに似てきている」「この教義は、会員たちの心に恐怖や罪悪感、不安を植えつける」「この集団はマインドコントロールの技法を用いている」というものである。また、脱会者の手記には次の共通点がある。

①当人は人生の問題で悩んでいる

②その解決の手段として「聖書の勉強」に誘われる

③友好的な雰囲気が気に入り、深入りする

④疑問を感じるようになっても決まったプログラムが進行してしまい、いつの間にか自分の頭

で考えられなくなる。
　続いて、この団体の教えの特徴として以下の３点が指摘される。
①弟子化
「弟子たちは皆、地上の全ての国々に、弟子たちの教会を立てる計画に参与しなければならない」と言われ、弟子の働きは伝道活動に限られる。
②「罪のリスト」と「罪の告白」
求道者は詳細な罪のリストを作成するように求められる。罪悪感を抱いた求道者には受洗が求められる。受洗後も弟子には日々罪の告白が課せられる。アメリカでは、罪の内容がコンピュータに入力され管理されていたことが発覚し、社会問題になった（1993年）。
③十字架
ある脱会者によれば、罪のリストを示されて「この罪がイエスを十字架に架けた。あなたがイエスを殺した」と言われるという。それから神の赦しと献身が同時に説かれるのである。

＜まとめ＞
教団の最高指導者は、「聖書に忠実であるためには、既成の教会ではなく、第一世代のキリスト教に帰らなければならない」と主張する。しかし、聖書自体が歴史的産物であり、2000年の歴史を無視する「無歴史性」の主張は、それ自体成り立たないものである。かえってそのような原理主義的かつ非歴史的な聖書解釈は、教団の権威者の主観による教義を生み出すことにつながる。「弟子となること」「罪のリスト」「罪の告白」などはそれを実証しているといえる。

3）『朝日新聞』2000年10月25日朝刊「検証・カリスマを求めて〈上〉心のすき間にかかる声」

＜「仲間」の裏側にマニュアル･･･書店で話しかけられ＞

＊街角で声をかけられて宗教的な団体に引き込まれる若者たちがいる。何が好奇心をくすぐり警戒心を解かせるのか。＊

今年２月のある日の夕方、大学院生が東京・新宿の書店「紀伊国屋」の福祉コーナーで立ち読みしていると、隣りの若い男性が「福祉関係の人ですか」ときさくに話しかけてきた。
若者は、笑顔を見せながら言った。
「福祉の専門学校に通っていて、今度就職なんです。不安で･･･ そういう関係の方だったら、お話が聞けるかと思って」
なれなれしいと感じつつ、若者の話を１０分間ほど聞いた。 若者はクリスチャンだと明らかにし、「教会で男の人生について考えるイベントがありますから来ませんか」と誘った。
（このあと大学院生の生い立ちと若者に誘われたあと教会へ出向くでの心理的経過が書いてあるが、省略）
そこは､教会の暗いイメージを覆した｡真新しい建物に光が差し込む。イエスの像も見えない。歌手の木村拓哉が主演したテレビドラマの舞台にもなったといわれ、スピーカーからポップス調の音楽が流れる。黒い服にサングラスの牧師が出てきて、「今日は来てくれてありがとう」というと、４００人ほどの若者から「イエー！」と声が上がった。お笑い系のテレビ番組のよ

うだった。
それから毎日のようにイベントへの誘いの電話があった。手巻き寿司で、誕生日をしたり。バレーボール大会に出たり。メンバーが共同で住んでいるマンションの一室では、深夜まで聖書の勉強会をした。
「罪」の勉強会にも出た。･･･(省略)･･･「これまでにない仲間ができた」とうれしくなり、勧められるままに洗礼を受けた。
だが、信徒になって勧誘する側に回ると、その仲間たちも決められた勧誘グループで、勉強会にもマニュアルがあることがわかった。収入の１割りを献金する義務もあった。自分の上司のような人が指定され、どんな行動も伺いをたて、報告しなければならない。従わなければ「罪を犯した」と批判された。
結婚も、教会が決めた会員同志でしか許されないこともわかった。「おかしい」と感じ始めた。インターネットで、元信徒たちが体験談を載せているサイトを見つけた。「自由がなくなり、身も心も組織に取り込まれた」と苦しみがつづられたいた。数日後に脱会した。（終わり）

4）『朝日新聞』2000年10月27日朝刊「検証・カリスマを求めて〈下〉脱会後ほしい心の受け皿」

＊ 脱会しても心が解き放たれない人がいる。孤独と虚無感に襲われた時、誰が心の傷をいやしてあげられるか。＊

〈新しく歩み出したい…襲いかかる虚無と孤独〉女子大生の場合

何かがすごい勢いで追いかけてくる。人か物か、分からない。必死で逃げて、限界で、はっと目覚める。

翌日の夢はまた違う。

仲間だった信者が迎いにきて「一緒に帰ろう」と言う。断わらなければいけないと思って苦しくなる。

こんな夢を毎晩のように見た。

「朝、起きたらどっと疲れている。また１日が始まるかと思うと苦しい」

この女子大生は、二ヶ月ほど前に宗教団体から脱会した。入信していたのは八ヶ月足らずだったが、今だに心が安定しない。

入信していた頃、毎日、勧誘する目標人数が決められていた。起きた時から目標を達成することだけを考え、達成できると「これで人々を救えた」と次の使命感に燃えた。生きていることが意味のあることに思えた。

脱会したとたん、一日をどう生きたらいいのかが分からなくなった。

大学では明るくふるまう。友達は、入信したことを知っても責めなかった。「親身になって聞いてあげなくてごめん。今は悩みない?」と聞いてくれた。ただ、気遣われると、なぜか悲しくなる。

「普通に生きているみんな」がすごく楽しそうに見え、自分が情けない人間に思える。

東京･渋谷で遊ぶ女の子達を見ると教団で教えられた言葉がよみがえる。「彼女たちは何を求めてあんなむなしいことをしているのか」と。男性に近づくことも、ホラーの映画を見ることも、教団で禁じられていたことをするのに、いちいちためらいを感じる。

夜、仲の良かった信者たちが、泣いて電話をかけてくる。「戻って来るよね。神様から離れないよね」

電車の中で、ふと隣りの人に話しかけてしまったことが何度かある。教団のことをすごく悪く言いたい衝動に駆られる。声を掛けてから、我に帰る。「何をしているんだろう。私。まだマインドコントロールが解けていない」。しかし、すぐ後に「許してください」と神への言葉が出てしまう。

「本当の自分を取り戻したい」と自分と闘うほど、どこまでが本当の自分なのか分からなくなる。

最近、友達がカウンセリングに行くことを勧めてくれた。カウンセラーと話すようになって、少しずつ過去の自分の気持ちを整理できるようになった。

《そう、最初、信者から喫茶店で声をかけられた時は、もっと幸せな日々を送っていた。ただ、オウム真理教や法の華三法行の事件を見て、宗教にそこまで走る人の心理はどうなっているのか、興味があった。教団で「あなたなら人のために働ける。期待が大きい」といわれて、どんどんその気になった…》

他の脱会者や家族も紹介してもらった。「あるある、私もそういうこと」と反応してくれると「私だけじゃないんだ」と気が休まった。

いま、女子大生は思う。

「生きる目的は何十年たっても分からないかもしれない。でも、今は生きていることに意味があると思えるようになった。元の私には戻れないけれど、これから新しい自分をつくっていきたい」

5）AERA（朝日新聞社）’02.3.25 No.13「脱カルトの苦しみ」

（内容）

カルト団体の虚構に気づき、マインドコントロールを脱しても心の支えをなくした虚脱感が襲ってくる。その空洞を埋める術を自らの手で掴むまでの、元信者たちの「自分探し」を取材したもの。入信前に直面していた問題に再び直面するケース、後遺症が残りに新たに他の宗教に依存するケースなどがある。オウム真理教を初めとする５つの団体の元信者が対象だが、そのうちの一人が東京キリストの教会の脱会者である。

（該当部分のまとめ）

その元信者はキリスト教系の教団で３年間活動し、脱会直後からほかの教会に通っている。寂しさや仕事への不安から教会に通ったが、そこがカルトだった。勧誘方法に違和感があったが離れなかったのは魅力があったからという。「それまでは他人に自分の気持ちを話せなかったが、大勢の前で罪の告白をするのが快感だった。」　今通っているのは「普通の教会」であり、その教えに満足している。